

# THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニュースレター

NO. 57

2007年10月

## Special to the Newsletter

### 「抵抗から権力へ」 アメリカ大陸先住民族運動の新たな転回

小林 致広

2007年3月下旬、グアテマラのテクパン市の聖地イシムチェで開催された「第3回先住民族大陸サミット」にオブザーバーとして参加することがあった。サミットにはアメリカ大陸19カ国の先住民族代表やオブザーバーなど2千人以上が参加したが、7割以上はマヤ、ガリフナ、シンカといったグアテマラの先住民族の参加者だった。ついで多くの代表団を派遣したのは、外務大臣を含め約100名近くがチャーター機で参加したボリビアで、エクアドルからは50名前後、ペルーとメキシコから40名前後が参加していた。3つのパネルと15部会が開催され、活発な発表や質疑応答が行なわれ、4日目はパネルや部会の討論を総括する全体集會が開かれた。5日目はグアテマラ市憲法広場までデモ行進が行なわれ、サミットで採択された決議「イシムチェ宣言」などが公表された。

期間中、早朝にはイシムチェ神殿での宗教権威者による儀礼、夕方には各先住民族の代表団による伝統的な音楽や踊りなどの文化イベントなども開かれた。聖地イシムチェでは電力が十分確保されないため、夕方の文化イベントは市内の体育館などが会場となった。テクパン市民は、山高帽のアンデス女性が荷物を背負って市内の市場などを闊歩する姿を興味深そうに眺めていた。

サミットは第3回と銘うっているが、正式の名称は、第1回と第2、3回では微妙に異なっている。第1回は2000年にメキシコのアカプルコで開催され、名称は「先住民族大陸サミット」だった。2004年にエクアドルの首都キトで開催された第2回は、「アビヤ・ヤラ先住民族・先住民ナシオナリティ大陸サミット」という名称だった。先住民ナシオナリティ(nacionalidades indígenas)という用語はエクアドルなどの独特の用語法で、独自のアイデンティティを共有する歴史的・政治的集団を指し、アンデス高地とアマゾンにまたがって居住するキチュアがその代表的なものである。一方、その下位概念とされるのが共同体を基盤にした先住民族(pueblos indígenas)で、民芸品や交易活動などで有名なオタバロはキチュアの下位カテゴリーに属する先住民族とされる。この表現は誤解を生みやすく、今回も、先住民ナシオナリティなど「気兼ねした」名称でなく、nación indígena、あるいはpueblos indígenasとするべきだという意見が出された。

第1回目との大きな違いは、アビヤ・ヤラという呼称が付加されていることである。アビ

ヤ・ヤラは、パナマのサンブラス諸島に住む先住民族クーナの言語で、「十分に成熟した大地」を意味する。「盗人紛いの侵略者」アメリゴ・ベスプッチに因んだ「アメリカ」でなく、アビヤ・ヤラという用語をアメリカ大陸の先住民族の宣言などで使用することが呼びかけられ、1970年代以降、この用語はアメリカ大陸の先住民運動で使われてきていた。1992年の「抵抗の五百年」に関連した集会などの決議文では、アビヤ・ヤラという表現が使われている。しかし、今回のような大陸規模の国際集会の名称としてアビヤ・ヤラが使われていることは、大きな時代の変化を窺わせるものである。

それを如実に示すのが、サミットのスローガン「抵抗から権力へ」である。このスローガンが登場するきっかけとなったのは、2006年1月のボリビアにおけるエボ・モラレス大統領就任である。先住民大統領の呼びかけにより、1月にはラパスで第1回アメリカ先住民権威者集会が開催され、同年7月にはペルーのクスコで先住民組織アンデス調整委員会（エクドル、ボリビア、ペルー、チリ、アルゼンチンの先住民族組織で構成）の創設集会が開催された。それを踏まえて、同年10月にはラパスで「第1回アビヤ・ヤラ先住民族大陸集会」が開催され、「ラパス宣言」が採択されている。その際のスローガンが「抵抗から権力へ（De resistencia al poder）」である。今回のサミットのスローガンはそれを引き継いでいるのである。

植民地時代から続けてきた抵抗の段階は終り、先住民族は「権力」を行使する段階にあると宣言されたといってもよいだろう。上記のスローガンは、先住民族による「権力（＝政権）奪取」を奨励しているのだろうか？先住民族出身の人物の政権掌握は先住民族の窮状の改善を約束するものではない。そのことは、メキシコの最初の「インディオ」出身の大統領ベニト・フアレスが行なった自由主義的「改革」が先住民共同体の破壊に大いに寄与したことを想起すればわかるだろう。

権力が依拠する国家のモデルが大きく変わらないかぎり、権力者の民族的属性は大きな意味を持つものではない。国家のなかに埋め込まれている先住民族に対する垂直的な支配関係が改変されないかぎり、先住民族にとって新しい展望が開けるものとはならない。今ある国家の枠組みのなかに政治的に参加してだけで充分ではない。メキシコのサパティスタの善き統治評議会、グアテマラ先住民族の土地占拠闘争など、先住民族が変革の担い手となり、国家による先住民族の文化的権利の認知はある程度は進んでいるように見える。しかし、実際には「腐った多文化主義」が横行しているだけではないのか？グアテマラ在住の社会学者サンティアゴ・バストスは、経済最優先の新クリオージョ型寡頭主義が支配的な中米においては、選挙や「異文化共生（interculture）」という方法で、新しい多民族国家を建設できると考えるのはあまりにも楽観的であると疑問を呈した。従来ラテンアメリカにおける民族解放闘争とメキシコのサパティスタ民族解放軍の闘争が異なる点のひとつは、そうした国家権力奪取が運動の目標となっていないことである。

確かに、ボリビアやエクアドルの先住民族運動は、中央政府や地方議会における政治参加、あるいは地域レベルや共同体における先住民自治の実践などを通じて、一定の形で政治的権力を行使するという経験を積んできている。そうした経験のなかから、新しい国家のモデルを提起していることも事実である。サミット参加者の多くは、新自由主義に代表される旧来

の西欧的な概念や行動様式の見直しを強調した。それが、ケチュア語で「転回」を意味するパチャクティ (pachacuti) である。

ボリビア外相チョケワンカは、パネル「先住民族と国民国家」の基調講演で、西洋的な個人主義的な思考法から先住民族の先祖伝来の宇宙全体を考える思考法へと回帰する必要があると強調した。人と自然が均衡状態で共生する関係を取り戻すためには、思考法そのものを変換する必要がある。自然を個別に開発可能な石油、鉱産物、水、森林などの経済的資源と見なす考え方を止める必要がある。それがパチャクティである。「領域、自然資源、先住民族」というパネルで、ペルーの鉱山被害共同体全国連盟のパラシン・キスペも、同じ趣旨の発言を行なっている。先住民族の生活基盤である領域は、人間が生活する地表だけでなく、太陽や月、星のある上の世界、そして鉱産資源などのある下の世界を含むべきであると、彼は主張する。また、重要な生活原理として、集団内部における対等性、相補的二分原理、母なる大地パチャ・ママへの感謝を基盤とした互酬性をあげている。この種の「転回」の必要性を強調したのはアンデスの先住民族だけでない。グアテマラの環境保護組織「母なる山」の代表レイ・ロサも、生態系は時空にまたがる芸術であり、将来の世代を育む源泉であると主張した。そして、水、石油、森林という分断した形で資源を利用してきた消費主義を転換し、母なる大地 = 生命という統合的な発想に立脚する必要性を訴えた。

ボリビアの先住民族大統領就任は、先住民族政府の樹立、あるいは先住民族統治の実現という先住民族運動の新たな目標に向かうための転回点になるのか？ 1990年代半ばには、先住民族の権利や文化に関して政府との合意が成立していたグアテマラやメキシコにおいては、そこで謳われていた先住民族の諸権利の憲法への明記すら進まず、両国の先住民運動は完全に分散化しているといつてよい。サミット参加者の大部分を占めるグアテマラの先住民参加者の関心は、ボリビアの先住民族の運動体験、「社会主義を目指す運動 (MAS)」が提起する展望は停滞を克服するモデルとなるのかという切実なものだった。あるグアテマラ先住民は、コカを服用すればボリビアのようになれるのならそうしたいという冗談めかした発言で、ボリビアの先住民運動に関する質問を締めくくった。

私がこのサミットに参加しようと思った理由の一つは、サミットのプログラムで主催者演壇中央の国際代表団席にリゴベルタ・メンチュウの名前があったことである。グアテマラ大統領選挙のキャンペーンの一環として、リゴベルタがこのサミットを組織したのかと思っていたからである。サミット組織委員会とメンチュウが立ち上げた政党にWaqib (コーディネイト) という同じ言葉があったためである。推測はみごとに外れ、グアテマラ入国直前に手にした最新プログラムには彼女の名前はなかった。しかし、ボリビア大統領エボ・モラレスが最終日に参加という別の驚きが用意されていた。結局、それも実現しなかった。

だが、個人的には別の驚きが待っていた。1992年、五百周年に関連して日本で行なった集會に招待したメキシコの先住民ジャーナリストと15年ぶりに出会ったのである。その結果、国際インディオ通信報道社 (AIPIN) を主宰している彼からラテンアメリカの先住民族に関するニュースがほぼ毎日届くことになってしまった。

(神戸市外国語大学教授)

## 文学の中のアメリカ生活誌（48）

新井 正一郎

Mail（郵便） postはフランス語poste「取扱所」からきた言葉で、イギリスで初めて使われたのは15世紀であった。今日のアメリカ人が好んで使う同じ意味のmail（ドイツ語の「袋」にあたるmalbaから）はこれよりさらに古く、13世紀のイギリスで通用していた。17世紀の入植者が、先きにアメリカにもちこんだのはpostという言葉だった。mailという言葉が、アメリカで使われるのは1840年代になってからである。

17世紀初頭から18世紀前半にかけて、北アメリカに開拓されたばかりの人家のまれな地域（イギリス領植民地）で暮らす人々、とりわけ隔絶感にさいなまれていた女性たちにとって、船で運ばれてくるイギリス本国の親戚や友人からの手紙は、大きな楽しみであった。が、当時の通信事情は貧弱で遅かった。天候が悪化すれば、船が荒立つ大西洋を横断するのに何カ月も要したし、手紙を出すにもニューイングランドの植民地には書簡を取り扱ってくれる所もなかった。母国と植民地間を行き来する郵便物を最初に扱ったのは、ボストンで宿泊業を営んでいたRichard Fairbanksという人であった。1639年、マサチューセッツ湾植民地総議会はFairbanksに、自宅に預けられた郵便物を母国向けの船舶に積み、到着した郵便を受取人に配達する権限を与えた。同時に彼に1通当たり1ペニーの料金を発送人または受取人からもらうことを許可した。こうしておぼつかないpostal system（郵便制度、1639年の言葉）が新生アメリカに生まれた。独立運動の頃、イギリスから植民地のアメリカ人が戦争誘発法といった情報を耳にしたのは、この通信路線を通じてであった。尤もフランス革命のきっかけとなった1789年7月のバステューの牢獄のニュースを、George Washington大統領が知ったのはその年の秋というから、18世紀末になっても、アメリカの郵便制度は貧弱であった。

植民地間の通信連絡は更にひどかった。当時のアメリカにはまとまな道路はまだなかったからだ。そうした状況を打開するため、ニューヨークの総督Francis Lovelaceは、ニューヨークとボストンを結ぶ月一便の定期郵便サービスを1672年に開始した。とはいえ、悪天候の場合、特に冬の間は、配達人がニューヨークとボストンの間を往復するのに1カ月かかった。文書を早く、確実にするために、1692年、Boston Post Road（ボストン郵便道路）が建設された。1685年には、ニューヨークの町民議会は同じ目的のために、ニューイングランドの全ての植民地間に書簡取扱所を設けること決定した。これを受けて、1683年にはペンシルヴェニアに植民地初のpost office（郵便局）ができた。postmaster（郵便局長）という名が生まれたのもこの頃である。最初の郵便局長になったのはHenly Waldyで、その主な任務は馬とpost riders（郵便運搬の騎手）を備えることであった。17世紀末になると、植民地内の郵便整備が課題になった。植民地間の物資、人間、文書の行き来が盛んになってきたからである。1694年、イギリス国王はこれに応え、後にGeorge Washigtonの財務長官を務めるAndrew Hamiltonを植民地の郵便事業を総括する郵政長官に任命した。彼は路線の開拓、配達人の通行税の免除など次々と業務改革を行った。だが、郵便事業の会計報告は毎年赤字続きで、イギリスの局には一文の送金もできなかった。この事態を救ったのが、1753年から1774年まで全植民地郵政副長官に任命されたBenjamin Franklinである。彼は*Autobiography*の中で自らの経営努力によって「国庫への収入はアイルランド郵便局の3倍に達した」としている。しかし、1774年、イギリス政府は機密に属する手紙をニューヨークの通信連絡委員会、事実上の外務省に暴露したかどで、彼を枢密院に呼び、郵政副長官の職を解いてしまった。その結果、再度経営が行き詰まり、翌年植民地アメリカの郵便の長い歴史に幕をおろすことを宣言した。

Restaurant (レストラン) 植民地時代は、金持ちは家で食事をしたが、独身男は、居酒屋か tavern 又は ordinary (居酒屋) という名称の店か cook - Shop (料理店) とか victualling house (飲食店) と呼ばれた宿屋で食事をした。旅する人もこうした施設で食事をした。この種の店は入り口に、一見してそれとわかる目印、つまり「飲食物、宿泊の便宜を与えます」と文字で表現した看板を掲げていた。これは当時のアメリカでは識字率が高く、文字を読めない旅人がきわめて少なかったことを示すものだ。飲み食いの店の看板を一変させるのに影響を及ぼしたものが、独立戦争時に結んだフランスとの同盟であった。フランスから人員、糧食、弾薬、艦船を手にするので実現できたイギリスからの独立は、フランスの習慣、フランスの言葉、フランス料理等のアメリカへの流入を意味した。とりわけフランス食文化の普及に大きな貢献をしたのが、1785年から4年間、フランス駐在大使であった Tomas Jefferson である。立派な下宿はパリ風の建物を連想させるということで、pensions francaises と呼ばれたように、1827年になるとニューヨークの上流階級向けの tavern は restaurant と名乗って店開きした。尤もボストンでは、独立戦争後の混乱期 (1794年) にレストランやレストランの経営者を指す restorator という初期のアメリカ語を看板にした店が登場し、ボストン人の関心を引いた。

初期にできたレストランは、外食をしなければならない人々や舌への喜びに執着する人々を対象にしていたので、料金は高く、しかもホテルを連想させるようなもったいぶった造りであった。それはまた新しい語彙と食習慣を生み出した。例えば、1829年に完成したボストンのトレモント・ハウスは、200名を収容できるレストランを設置して評判になったが、1855年に建設されたバーカー・ハウスのレストランは、正午に顧客がディナーをとるという習慣を、フランス風に午後3時に改めたことで有名になった。このレストランは a la carte (料金表) をテーブルに置いた最初のホテルであった。1830年代になると、顧客たちは、いろいろな料理の載っている menu (メニュー、1830年代の言葉) を見て注文するようになった。bisque (貝、甲殻類のスープ) や tabled - d'hote (定食) や file (一覧表) という料理に関するフランス語が流行したのはこの時期である。

1830年代にニューヨーク市の下町に小さな店を開業し、数年のうちに最高のレストランの代名詞になった「デルモニコ」を手本にして、南北戦争後に eating palace (料理宮殿) とか 1 obster palace (えび宮殿) と呼ばれるさまざまな豪華なレストランが登場した結果、アメリカにそれまでなかった優雅に食事を楽しむ習慣が広まった。新しい豪華なレストランが開業すれば、新しいサービスや料理も生まれたのは当然である。1880年代にデンバーにできた英国資本のウインザー・ホテルは女性客の注文を受ける ladies ordinary (担当女性) を導入した。1890年代にウォルdorf・ホテルとアストリア・ホテルが合併して誕生した Waldorf Astoria (ウォルdorf = アストリア・ホテル) で有名なのは、正装しなければ入れない Palm Gardens (椰子の園) というレストランと料理長 Oscar Tschirky が考案したりんご、セロリーなどにマヨネーズをかけた Waldorf salada (ウォルdorf・サラダ、1911年の言葉) それにロビーからそのレストランに行くまでの200フィートに及ぶ遊歩道であった。有名人が行き来するそのブロードワードは Peacock Row (くじやく通り) と呼ばれた。ついでにすると、ウォルdorf = アストリア・ホテルはエンパイア・ステート・ビルディングを建設するために1931年に取り壊された。次は *Great Gatsby* (1925) の一節。「建物には3つの店が入っていたが、うちの一軒には貸店舗の札がかかり、あとのひとつは終夜営業のレストランで、入り口には灰の踏み分け道がついている」(村上訳)

(天理大学国際文化学部教授)

## Essay

## ブラジル伝道庁初代庁長大竹忠治郎

## - その時代背景を通して -

矢持 善和

今回発表した内容は、平成14年度に増井真孝君によって天理大学国際文化学部ブラジル学科に提出された卒業論文『大竹忠治郎の信仰の根底にあるもの』の資料をベースに、矢持が再編集・再構成し、日伯交流年記念号「ブラジル伝道の父 大竹忠治郎の信仰信念と親心」としてアメリカス学会から出版する書籍の概要である。

増井君は、この論文で当時改組前の英米学科、イスパニア学科、ブラジル学科が創った「天理大学アメリカス学会」が、1996年度から、それぞれの3学科（現コース）から1名づつの最優秀論文を選出して授与する「酒本真理子賞」を受賞している。

折しも、来年度（平成20年）2008年は、日本からブラジルに初めての移民が出発してから丁度100年めに当たる。日本政府とブラジル政府も来年1年間を「日本ブラジル交流年（日伯交流年）」と定め、日本国外務省も実行委員会を立ち上げている。この交流年に向けて、ブラジル移民史の中の天理教伝道、更に大竹忠治郎先生の功績をクローズアップ出来れば幸いである。

さて、大竹先生の幼少年時代から1981年の千代夫人の出直しに至るまでの期間を、個人的な視点から描いた大竹忠治郎史（バイオグラフィー）については、吉村英朗著『大地と大洋の子』があり、ブラジル伝道全般の歴史については、『ブラジル伝道史第一巻』と『ブラジル伝道史第二巻』など数多くの書籍がすでに出版されている。また、41名の方々による大竹忠治郎先生との思いでを綴る追悼文及び、追悼座談会記録などが収録されている『荒道開拓』は1994年に出版されている。

そういった事から、本書では増井論文が参考とした上記の資料を中心に本文を再構成し、大竹先生が書き残された『手記』1～29のいくつかを抜粋し、そこに歴史的解説とコメントを加えている。

「ブラジル伝道の父 大竹忠治郎の信仰信念と親心」の内容は、第一章が序論、第二章に於いては大竹忠治郎先生の生涯をブラジル伝道と関連してとらえ、先生がその生涯を通して貫いた精神、信

仰信念を描いている。第三章に於いては、大竹先生の信仰姿勢と親心の視点から、先生が数多くの教信者を教え導いて来た後ろ姿、つまり信仰姿勢と親心を探っている。そして、第四章の結論において、総括がなされている。

また、この二つの視点を更に充実させる意味において以下の参考文献、並びに資料を軸として本書を構成した。まず、全部で29冊もの先生ご自身の「手記」を初め、『天理教概説』、『天理教ブラジル伝道史第一・二巻』、『南海大教会史第一・二・三巻』、『復元第十五号』、『大地と大洋の子』、『山田清治郎追悼録』などの文献は先生の生涯を捉える上で重要な文献であった。更に、先生の信仰姿勢と親心を求める上においては、『荒道開拓 大竹初代庁長夫妻追悼集』などが主な文献であるが、これのみでは不十分と考え、先生と親しかった方々に増井君がインタビュー（2002年7月7日より26日まで）を現地ブラジルに於いて試み、本論に加えた。

さて、ブラジルを含むラテン・アメリカ諸国では憲法による政教分離原則があるにもかかわらず、今もカトリック教が「国教」と同様の地位を占めている。

1888年の奴隷解放後、共和制に切り替わって僅か20年後のブラジルに最初の日本人移民が渡ってから、仏教、神道に交じって大本教、生長の家、そして天理教などの新宗教団も海を越えてブラジルの地に渡っていった。そして戦後には、ブラジルでの入会者数が60万人を越えるといわれるPL教団を筆頭に、世界救世教団、創価学会などが非日系ブラジル人社会に浸透していている。

その中で、本書で増井君が描く大竹忠治郎天理教ブラジル伝道庁初代庁長は、そのブラジルに於いて、時代の流れに翻弄されながらも言語や習慣、民族的偏見や貧しさを乗り越えて、ひたすら天理教の教えに基づき数多くの人々を救済し、「陽気ぐらし」の教えに導く「親」として慕われ敬愛されるまでの道程が描かれている。また、当時の資料や直筆の『手記』を数多く引用する事によって如実観溢れる大竹忠治郎先生と回りの方々との心の流れを再現し、如何に先生が素直に「神一条」の道を歩んだかを浮き彫りにしているようにも思われる。

一方、ブラジル在住の天理教関係者からのインタビューでは、大竹忠治郎ご夫妻から直接の指導を仰がれた人々の心の変化が手に取るように見え

て来るものもある。これら一連の人々の中にはすでに出直（死去）されている方々もおられる事を考えると、本書は貴重な資料集でもあると考える。

（天理大学国際文化学部准教授）

## Essay

### 二つの帝国の狭間で 在米天理教布教師戦時抑留の史的文脈

山倉 明弘

第2次世界大戦中の在米日本人および日系アメリカ人の戦時強制排除・収容の研究は、米国政府の政策を歴史学、法学、政治学、人類学などからマクロに分析するものと、政策の被害者たちのライフ・ヒストリーに立ち入ってミクロの視点から分析するものに大別される。この研究発表をその両方を含みながら、日系人の一集団という両者の中間レベルの分析を合わせて行うものである。

同時にそれは、日本または米国だけの一国の視点に限定せず、トランスナショナルな視点からの分析でもある。天理教は明治時代に国家による厳しい弾圧を受け、教団の生存のため国家政策への妥協をよぎなくされた。国家神道体制への表面上の妥協という状態でアジアへ、またアメリカス世界へと布教に出かけた。

アジアに出かけた天理教布教師は、天理教が「帝国の旗」に従ってアジアに出かけた形になったため、国力を増強させアジアで影響力を増しつつあった国家の威信を強く感じた。一方、アメリカス世界へ出かけた天理教布教師は基本的には出移民のあとを追うように布教に出かけた。あるいは自身が移民としてアメリカス世界へ出稼ぎに行き、そののちに布教師となった。そうした布教師や信者たちは、アジアに出かけた天理教布教師や信者と違って、国家の威信の恩恵に預かることはできなかった。それどころか、日本と米国の国益が衝突するようになると、北米やハワイでは反日、排日の重荷を強く感じるようになった。

本研究発表では、天理教布教師が日本から米国へ持ち込んだ帝国の政治・経済・思想の重荷が何であったかを論じ、ついで、ホスト国である米国の1930年代、40年代初期の政治的、経済的、文化

的情况は何であったかを論じた。在米天理教布教師は、この2つの帝国の狭間で翻弄され、呻吟し、その中で信仰の道を模索した。

これまでに出版された天理教の北米伝道史を通観すると、日米戦争の時期は布教活動が中断され、信仰活動も大きな制約を受けた「暗黒の空白期」というのが、定説であるという印象を受ける。実際に多くの在米天理教布教師が日米開戦による敵国に「敵性」外国人として取り残されたのである。母国と受け入れ国との戦争という苦難を体験した布教師本人たちが「暗黒の空白期」を感じるのは無理のないことであるし、また、体験者から直接聞き書きを行った人びとが、そのような印象を共有し、そう書き残すのも無理のないことである。

しかし、研究者としては「暗黒の空白期」言説を鵜呑みにすることはできない。特に、歴史研究者としては、「歴史の空白」というものは受け入れ難い。天理教布教師・信者であれば、難事に直面してこそ自らの信仰が試されるというものである。実際に、戦時抑留中も信仰活動は続いたし、筆者の浅見ではわずか一例であるが、にほいがけ（信者でない人への信仰のすすめ）に成功した布教師もいる。一番恐いのは、「暗黒の空白期」言説の影響で研究の空白が生まれることである。

1930年代、40年代初期、および日米戦争中の北米天理教のあり方、および布教師・信者が残した足跡は、ひとり天理教海外伝道史研究に留まらず、日系移民史研究、戦時抑留研究、そして日米関係史研究にも貴重な研究題材・資料を提供するであろう。

これまで、天理教北米伝道史を日米関係史や米国内史という大きな文脈において考察した研究はほとんど発表されていない。この手薄な領域をうめる作業は有益な研究となると確信している。

（天理大学国際文化学部教授）

## お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる11月17日(土)12:00から天理大学2号棟24A教室で、第12回年次大会を開催します。

なお、翌2008年はブラジル日系移民百周年の節目を迎えます。これを記念して、今年度は総会終了後に天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジル・ポルトガル語コースとの共催により国際シンポジウム「**アメリカス世界と外国人問題**」を開催いたします。筑波大学名誉教授・中京女子大学教授の駒井洋先生、ブラジルからはブラジル日伯交流年実行委員会文化部コーディネーターの吉岡黎明先生をはじめ国の内外から多数の論客をお招きし、グローバル化するアメリカス世界における多様な人の移動をさまざまな観点から考え、「多文化共生」をキーワードにして人権を軸にしたネットワーク造りの可能性を展望したいと思っています。

会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々のご来場も歓迎します。入場は無料です。

また天理大学アメリカス学会日伯交流年記念号といたしまして、増井真孝・矢持善和『**ブラジル伝道の父 大竹忠治郎の信仰信念と親心**』の刊行準備が進められております。総会までには発刊される予定です。乞うご期待です。

## 編集後記

巻頭言の小林致広先生(神戸市外国語大学教授)のご専門は文化人類学でありメソアメリカ先住民社会をフィールドとされています。これまでおびただしい数のご著書、学術論文を發表されております。今回いただいた原稿を拝読いたしまして、あらためてアメリカスの先住民にたいする「軸のぶれない研究姿勢と真摯なまなざし」に感動いたしました。

た。アメリカから「アングロ」「ラテン」等の形容詞を取り払いそこに暮らす人びとのアメリカ、しかも複数形のアメリカスを方法論とする当学会のニューズレターにふさわしい原稿をいただいたと感謝しております。また、今年度の国際シンポジウムとも接点のある内容でもあり、大会の成功にむけておおきな励みとなるとともに、口先だけの「多文化共生」の連呼とならないよう身を引き締めてシンポジウムに望まねばという思いを強くいたしました。

7月7日開催の夏季研究会においてご報告いただいた矢持善和(天理大学国際文化学部准教授)山倉明弘(天理大学国際文化学部教授)両先生のご報告要旨を掲載いたしました。なお、矢持先生の要旨は左記のご著書の紹介ともなっております。

多数の会員が毎号楽しみにしている新井正一郎先生(天理大学アメリカス学会前会長・現顧問の「文学の中のアメリカ生活誌」)はこれで48回となりました。まずは50回、次いで100回をめざしていただきたいと思います。

当学会の年会費は一般会員は、5000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 57: 2007年10月20日発行)

編集者: 吉川敏博

〒632 8510 天理市杣之内町1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/